

Program Note

坂本 知穂

■モシュコフスキ：ポーランド民族舞曲集 Op.55 より 第3曲「ポロネーズ」ロ短調

ポロネーズは本来フランス語で「ポーランドの」という意味。16世紀、ポーランドの宮廷で発祥した格式高い踊りで3拍子の比較的ゆっくりとしたテンポだ。この舞曲はその後ヨーロッパ各地に広まっていき、多くの作曲家がポロネーズを書いている。

マウリツィ・モシュコフスキ (1854～1925) は、ポーランドの作曲家、ピアニスト、教育者である。この舞曲集は、もの悲しい旋律が印象的で美しいこのポロネーズの他に、2つのマズルカ、クラコヴィアクと全て祖国ポーランドを代表する舞曲作品からなっている。

■ショパン：4つのマズルカ Op.24

1833～1835年作曲。1835年出版。ルイ・フィリップ・ベルテュイ伯爵に献呈。この頃なりに於いてショパンは作曲家・ピアニストとして共に充実した時期。

- ・第1曲 [ト短調] : アウフタクトで始まるメロディーは繊細で美しいクヤヴィアク。中間部は土臭さも感じられるようなマズルのリズムが現れる。
- ・第2曲 [ハ長調] : 4小節の序奏の後に始まる活発なオベレク。中間部は変ニ長調に転じ、踊る様子が目に浮かぶかのような楽しいマズル。
- ・第3曲 [変イ長調] : 大らかで明るく、愛らしいマズル。オベレク風のコーダで魅力的に終わる。
- ・第4曲 [変ロ短調] : 彼のマズルカの中でも最も充実した傑作の一つ。途中ユニゾンと和音によるエピソード風の部分が現れるが、ユニゾンは合唱の女性のパートで和音の箇所が混声合唱だと、ショパンは弟子に教えている。

■ショパン：ノクターン 第20番 嬰ハ短調 遺作

1830年作曲。1875年出版。正式な献呈とは言えないが、姉のルドヴィカに贈られた。元は“レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ”のみの記載であったが、後にルドヴィカが「ノクターン風レント」と記した。中間部にはピアノ協奏曲へ短調の中のモチーフが使われている。

■ショパン：ノクターン 第2番 変ホ長調 Op.9-2

1830～31年作曲。1832年出版。Op.9はこの第2番を含め3つのノクターンからなっており、カミーユ・プレイエル夫人に献呈されている。穏やかで優雅なこの作品は、最も聴き手に愛されているノクターンの一つだろう。繰り返される主題は、その度に繊細で美しい装飾を纏い、変奏される。

■ショパン：ノクターン 第10番 変イ長調 Op.32-2

1836～37年作曲。1837年出版。Op.32はカミーユ・ドゥ・ビリング男爵夫人に献呈されている。コラール風の2小節の導入部の後、三連符の伴奏によって現れる愛らしい旋律は、ピュアな素朴さでどこか懐かしさを感じる歌のよう。この主題から派生した中間部では平行短調（へ短調）に転じ、音の厚みと動きは増して感情を高ぶらせていく。その後回帰した主部も情熱的に再現され、最後は導入部のレントがコーダとして帰ってくる。

■ショパン作曲 4手のための変奏曲 ニ長調 KK.IVa/6

当時、ポーランドで「ムーアの歌」として親しまれていたメロディーを主題にした連弾変奏曲。ショパンが16歳の時の作品で、彼の唯一のピアノ連弾作品。

名ヴァイオリニストとして名高いパガニーニもこのメロディーを基に変奏曲を作曲し、パガニーニ自身の演奏でその作品を聴いたショパンは、後に再び同じ主題で「パガニーニの思い出」と言うソロの変奏曲を作曲している。